

## 雲南懇話会「第5回 Field Work」行動記録

(2009年11月)

1. 期間： 2008年11月2日(日)～2008年11月15日(土)、全14日間
2. 参加者： 亀田義憲(団長)、前田栄三(副団長、写真等編集)、秋畑進(コーディネーター)、岡邦俊、神山巍、齋喜國雄(記録作成)、松島岳生 計7名
3. 現地でお世話になった方々 (尹紹亭教授と通訳の3人は、全期間、行動を一緒した。)  
雲南大学民族研究院 尹紹亭 教授  
雲南大学民族研究院 張海 博士研究生(英語通訳)  
雲南大学民族研究院 曹津永 修士研究生(英語通訳を兼ねた中国側 Coordinator)  
雲南師範大学外語学院 宋旭艷 学部4年 (女性の日本語通訳)  
(元)雲南省文山州丘北県旅游局長 羅樹昆(苗族、彝族、壮族の村の案内役として同行)  
(訪問先の村々でお世話になった方々は、可能な限り文中に記載しました。)

### 4. 行動記録の概要

#### 11月2日(日) 曇り 日本～中国北京經由雲南省昆明へ 雲南大学ホテル泊

成田国際空港第1ターミナル南ウイングEカウンター前 0700 集合。  
成田国際空港 0900 発(中華国際航空 CA0422 便、離陸: 0910)。曇りで視界悪し。気流が悪く揺れる。北京の空はスモッグに包まれていて視界悪し。1310(日本時間)北京首都国際空港着(現地時間 1210、以下からは現地時間を使用する)。4時間の飛行であった。下界は爽やかな秋日和。上空を覆うモヤは名物の黄砂か排気ガスか? シャトルバスとシャトル電車を乗り継いでターミナルビルへ。飲食費等の共通経費として1万円/人を現地会計担当(松島氏)に供託。空港内の中国銀行で1万円を両替(希望者)。手数料 60元を含めて 662.67元。広大な空港内を移動して国内線搭乗口へ。



1425 北京空港発(CA4170 便、離陸: 1505)。30分の遅れで昆明を目指す。1545 昼食とも夕飯ともつかぬ食事ができた。1810 昆明着。空港ロビーで曹津永さんと宋旭艷さんの出迎えを受け(1845)、駐車場で運転手の蔡興貨さんと会合し、雲南大学のマイクロバス(30人乗り)で大学構内の一角にある雲大ホテルへ。1920 雲大ホテル着。バンコクから先着していた副団長とホテルで合流し、ホテル内の食堂で全員揃って夕食(7人で238元 1950～2050)。食後、付近の学生食堂街を散策して帰館(2125)。

11月3日(月)曇り 昆明市内の雲南民族博物館、雲南民俗村見学 雲南大学ホテル泊

0740 ホテル内の食堂でバイキング形式の朝食後、0905 専用バスで雲南民族博物館に向け出発。0945 博物館に到着。月曜日で休館だったが、事前の特別な計らいで館内を観覧することができた。雲南に住む 25 の少数民族の衣服や生活道具などが展示されていた。また、雲南出身で明代に活躍した大航海者「鄭和」の事跡も展示されていた。



1215 退館して近くの「郷村小榭」飯店で昼食(1225-1335)。食後、雲南民俗村見学(1345-1615)。入材料は大人 70 元であったが、65 歳以上は無料との事で 1 人を除いて無料となる。村内が広いので電動カート(400 元が、交渉で 20%引きの 320 元となる)で村内の各民族の村を見学する。ワ族、水族、蒙古族、モウソウ族、白族等の会場を回り、踊りや歌などを鑑賞する。帰途、街中の銀行で両替(3 人)。1700 銀行発→ホテル 1735 着。1800 ロビーに集合し、大学近くの火鍋で有名なレストランで会食(1815-2040)。帰りは雲南大学の正門を通過して構内に入り、帰館(2055)。

11月4日(火)雨 昆明~玉溪市新平県腰街鎮南碱村・花腰タイ族文化生態村を訪問。

南碱村民泊

0630 起床。食事(0730~0800)。0830 に集合したが渋滞のためバスが遅延し 0900 出発。



本日から英語通訳として博士研究生の張海さんが加わる。途中、尹紹亭教授と現地案内(兼調整)役の羅樹昆さん(元丘北県の観光局長)と会合し、郊外で高速道路に入る。

本日から少数民族の村々を訪ねる旅を開始する。まずはタイ族文化生態村を訪問するため昆明から南下して玉溪市新平県腰街鎮に向う。教授によると昆明の人口は 380 万人その内 100 万人は外から

来た人々とのこと、郊外には学園都市が建設中で雲南大学も将来都心から移転するとのことであった。沿道にビニールハウスが目だつて多い。園芸花の大産地という。新平で高速道を降りる(1145)。沿道にバナナの木が多くなった。国境はベトナム・ラオスだから暖かいのだろう。新平は彝(イ)族とタイ族の自治県だそうで 1220 市街地着。雨は上がった。

1230 新平ホテル着。新平県の宣伝部長で彝族の李樹華さん（女性）等に出迎えられ昼食を共にする。犬の肉を初めて食する。

1340 新平ホテル発。1445 花腰のタイ族文化生態村（南碱村）着。村の入口で盛装した村長白紹福さんや女性達の歓迎の儀式を受ける。綾取りの紐で作ったような門を潜り竹筒の白酒を飲まされ手首に赤い糸を巻かれて村に入る。



村は約 700 年の歴史があり、56 世帯 276 人が住む。通い婚の風習が残っているそうだ。村長は 3 年に 1 回、村人の投票で決めるとのこと。



村の傍を流れる川（紅河の上流、元江）には昔は大分魚がいたが、今では川の汚染と人口増で捕れなくなったという。農業が主で今はサトウキビの収穫期だそうだ。沖縄で見られるような細いのではなく幹は黒紫色で太く、甘くてジュースのようなものを食べきれないほど出してくれた。農作物は市場以外には市場に出すとのこと。苦瓜も作っていた。

高山の彝族は今も焼畑をやっているが、ここではもうやっていないという。この付近のタイ族は 7000 人程で出稼ぎが多い。そういえば若い女性は余り見かけなかった。この村の学校は廃校となり子供たちは 5 km 程先の他の集落の学校で寄宿生活をしている。廃校となった校舎は 3 階建てで、白壁の集落一のモダンな建物だった。村の祭祀の主催者は女性で 6 人いるが最高齢は 60 歳。車は作業用の車輛とオートバイだけで乗用車を持っている者はいない。文字を持たないので唄などを伝えるのは難しいという。刺繍は子供の頃から教えている。家の入口とか通りで女性が集まっておしゃべりをしながら刺繍をしていた。村内見学後広場の上の集会所で夕食（1745）。唐辛子と油で炒めた鳥、魚、豚肉、野菜が次々にテーブルに出てくる。白酒での乾杯、乾杯で大分酩酊。メンバーは 3 軒の民家に分宿する。

11月5日（水）曇り、小雨 午前中、同文化生態村に滞在・見学。昼食後、新平市に移動。

新平市鑫源酒店 泊

0840 朝食。朝食後集落の裏山（神の宿る山、神山）に村長の案内で登る（写真、左）。雨上がりの道に脚をとられて転倒者数名。張さんが稲の原種と言う植物を教えてくれた（写真、右）。村を流れる川岸（元江に注ぐ小沢）で魚を獲る仕掛けの様と養魚池を見学後、村内

を歩き集会所で昼食（川で獲れた大きな鯰と地鶏などの料理）。1410 発。新平市一番の鑫源



酒店着 (1520)。  
1800-1920 別館  
で夕食。1940  
から希望者は  
街中に民俗舞  
踏を鑑賞に出  
掛ける。

11月6日(木) 朝雨残る→曇り→晴れ 新平市から個旧市を経て山上の苗族の村(卡房鎮)へ移動。 楊維興さん宅 民泊。

0730 食事。0825 鑫源酒店発→1145 建水城市着→共産党の学校(建水县委党校) 構内の食堂で昼食(1205-1420)。昼食時、雷を伴う大雨に遭うが直に回復し陽が差す。食後、建水城市のシンボルである大門「朝陽楼」まで石畳の道を歩き、楼門に上がり周囲の景観を楽しむ。1420 発の予定であったが団員の1人が迷子となり 1500 発。長いトンネルを抜けるとビルが林立する個旧市街が現れた(1645)。錫の大産地、錫で潤う街である。ホテルでトイレ休憩して案内者の到着を待つ。日本製三菱パジェロに乗った苗族村の有力者・楊維興さんと会合(1655)。1740 同行する紅河州苗族会長・陶さんを待つ。雨の中、これ以上の悪路は無いと思える未舗装の悪路を前後左右に揺られながらノロノロと進む。街道筋と見え交通量多し。大きな鉱山事務所の脇で休憩(1935-40)。これ以上雲南大学バスでは進めないで4輪駆動車を頼むといていたが、何とか蔡運転手が技量を発揮して凸凹の山道を登る。途中、全員下車して歩くところもあった。山上の真っ暗な狭い道を慎重に運転して卡房鎮着(2100)。そして大幅に遅れて今晚の宿の楊さん宅に辿り着いた(2115)。遅い夕食と歓迎の宴を終えて就寝。楊さんは錫鉱山で財を成した成功者で村一番の金持ちとか。宿泊した家は250万元を投じて建築したといい、吹き抜けの応接室に大型の液晶TVが収まっていた。

11月7日(金) 夜来の雨止み→曇り 卡房鎮～紅河州蒙自市に移動。 天源大酒店泊

0630 起床。0720 朝食。周囲を山山に囲まれた小さな集落で標高は2000mに近い。朝になって見る楊さんのお宅は、この村にはそぐわないほどの御殿のような建物であった。本日、村外れの広場で行われる葬儀を視察するため、楊さん宅 0735 発。0750 葬儀会場着。葬儀は、5年前に亡くなったが当時は貧しくて冷葬(仮葬儀)で済ませた男性の本葬で、0800 開始予定で既に大勢の人達が準備中であった。

広場に造られたやぐらの周りを民族衣装を纏った遺族と親類縁者等数十名が行列を成し、シンバルを鳴らし竹笛を吹いて生贄の牛と共に何回も廻る。集落からも大勢の人々が見物に集まり、食物や小間物を売る露店も店を開いていた。やがて女性たちが一箇所に集まり

盛んに泣いている。これも儀式の一つなのであろう。生贄を殺す前に祈りのような儀式があり、鼻輪を両側から綱で引かれた生贄の牛を爆竹で驚かせながら二人の若い男が牛の眉間目掛けて玄翁を打ち下ろすこと2回、斃れた牛の笛を直ぐに切って血を抜き、解体の準備作業に入っていた。後ほど葬儀の参列者達が食べるのだらう。



集会所の前で竹箵を持った若い女性達の踊りや老人が竹笛を吹きながら舞う踊りを見物する。2人の若者よるこの僻村には場違いなドラムと電気ギターの演奏には驚かされた。1010 広場を後に村の外れの辻まで盛装した娘や女達と歩き、記念撮影の後、村を後にする(1100)。

往路とは別の 2000mの高原状の道を行くが、これも聞きしに勝る悪路でバンパーをこす



るので途中から歩く。この道も生活道路で、偶に行き交う車やオートバイと出会う。1335 紅河州の州都蒙自市着。道路の広い清潔な街。名物の過橋米線を食す(1345-1430)。1440 今晚の宿、天源大酒店着。チェックイン後、1515 発。紅河州博物館参観(1550-1700)。1720 南湖公園を廻ってホテル着。1800 集合後、市内のハニ族の料理店(衆和酒店)で夕食(1900～)。

**11月8日(土) 晴れ 蒙自県城から元陽県の山上にある以前の県城に移動。 雲梯大酒店泊**

0630 起床。0800 ロビー集合後別館で食事。棚田を見るこの日、幸運なことに晴天！ 0920 天源大酒店発。沿道にバナナの木多し。赤く濁った紅河を渡り山上の以前の県城を目指す。1225 元陽旧市街の雲梯大酒店着。(旧市街というがホテルの住所は新街鎮となっている!)。昼食後、1410 ロビー集合、1415 棚田の観察に出発。最初の棚田スポットの小広場ではハニ族が大事にしている蛙、タニシ、水牛、鯉のモニュメントが我々を迎えてくれた。棚田観察の途中の集落で偶然にも彝族の新築祝いに遭遇(1550)。庭では民族衣装で着飾った踊り手がお祝いの踊りを披露し、玄関では世話役が村人達が持ち寄るお祝いの米、卵などを受け取っていた。当主の奥さんが家の中を案内してくれた。レンガ造りの一見2階建てに見えるが3階建てで3階が寝室、2階は物置き場、1階は台所と居間、屋上は穀物など

の乾燥場となっていた。建築費は 30 万円とか。ご祝儀に 50 元を共通経費から贈った。もち米で作った甘い餅のようなお菓子を振る舞われた。

しばらく集落内を散策後、夕日に染まる棚田を見下ろすスポットに出掛ける。眼下に広がる棚田を一望に見渡せる岩頭のスポットには、番人の婆さんが入場料 1 人 5



元の手書きの看板を持って待機していた。支払いを拒否して口論になるが無視。スポットの下には金など支払わずかつて知った脇の道から降りた現地のアマチュアカメラマン達が、カメラを構えていた。サクラ、サクラなどとブツブツ言っていた婆さんも、夕日が山の彼



方に沈む頃には姿を消していた。尹教授によれば地元の人達はこんな事はしないそうで、外部から来た人が婆さんを雇ってやらせているとの事であった。それにしても気の遠くなるような長い、ながい年月を掛けて営々と築き上げた棚田の景観には圧倒される。絶景は一日にしては成らず。1835 絶景ポイント発、1910 ホテル着。1945 集合して街の食堂（六軍酒家）で夕食。2150 帰館。

**11月9日（日）晴れ 棚田を見学、畦道を歩いてハニ族の村（民俗村）へ。**

**そして開遠市へ移動。**

**滇南大酒店泊**

別館で食事（0800）後、0905 ホテル発。昨日通った車道を途中で分れてハニ族の村「全福庄」でバスを降り、村内を歩く。石畳の道、放し飼いの豚や鶏、犬、漬垂れ小僧たちに半世紀前の日本の田舎を見るようだ。細い路地裏に尹教授の知合いの家を訪ねる。主人は不在であったが孫を背負った奥さんが中庭で迎えてくれた。機織機や藍染の瓶が未だ現役であった。辞去後、棕櫚で編んだ背負い子に荷物を括り付け、額に紐をかけて荷を運ぶ 2 人の女性とこの家の男の子の後に従って棚田へ向かう。



相当な重さの荷物だが足早に歩く。ここでは女性が働き者らしい。秋晴れの農道や田圃の畦道を通り、棚田を修理している人達や水牛を使って棚田を耕している人達を観察しながら歩く。石垣を積み上げ泥を塗り込めて畦を造っているが急斜面なので大雨の時などに決壊しないかと要らぬ心配をする。谷川に架かる橋の架け替え工事の現場まで、2 人は木材を運んで来たのだ。しばらくの休んでから、谷川を飛び越え 1135 発。先生と男の子の先導で、隣の集落まで 1 時間ほどの軽いハイキングだった。集落の外れには今は使われていない草葺屋根の水車小屋等があり、村には土産物屋等があった。ここは民俗村と称して入

場料を取って村の生活を見せている場所なのであった。我々は裏から村に入ったので有料とは知らなかったが、正門（入口）の女性係員が入場料を払うよう先生にクレームをつけてきた。民族学の権威は取り合わなかったようだ。バスの待つ道に出ると、村への分岐点（入口）に箐口民俗村の看板が掛かっていた。（1250-1300）。

新街鎮に戻り、昨夜の店の隣の包老六飯店で昼食（1315-1450）。1555 新街鎮発。紅河橋（1600-10、休憩、写真撮影）。途中沿道の果物屋でバナナ一枝（1625-30、10 元）を買う。個旧市で給油（1720-25）後、回族の街、開遠市の滇南大酒店（1840）着。1930 集合、街外れの火鍋料理店（重慶曾胖子）で夕食。日曜日の夜とあってか超満員の盛況で、喧騒と床にはティッシュの花が咲いていた。ここは好みの皿を自分たちで選び、その皿の数で料金を支払うシステムで日本の回転ずしのようなものであった（1945-2115）。夕食後希望者を募り、タクシーで街外れの足マッサージ屋「御足堂」に行く（2130-2335）。2345 帰館。



#### 11月10日（月）晴れ 開遠市～丘北県仙人洞村に移動。 仙人洞村民宿「荷花」

0620起床。0800ホテル2階で朝食。0915滇南大酒店発。酒店近くにある、隣国ベトナムのハノイに通じる鉄道の「開遠駅」を見学（0920-0935）。現在は貨物列車が1日1本運行されている。尹先生が駅駐在の警官に交渉してホームに立入ることが出来たが、警官の一存ではかけには見学できないようで、尹先生までがホームから出るよう早くはやくと急きたてる始末であった。ベトナムがフランス植民地の時代に建てられ、開遠に唯一残っている小規模な洋館を外から見学する。スモッグに覆われた開遠の街から郊外に出ると太陽が眩しい。新しい高速道路を走る。通行量は少ないが凸凹もなく快適でサービスエリアらしきものが工事中であった。日本のように高速道路にはSAやPAが見当たらない。沿道には集落が少なく、おむすびのような形をした山々が車窓から眺められた。炭房というところで高速道を降りる（1150）。通りには牛車、水牛車が目立つ。有名な唐辛子の産地で日干しの唐辛子が家々の壁を真っ赤に染めていた。



家の壁は泥に稲藁を混ぜて型に入れて造った正方形のレンガ状の土の塊を積み上げて造られていた。日本の土壁と同じような材料を使っていた。沿道には市が立ち、賑っていた。この唐辛子は日本にも輸出されているという。

丘北の街の入口で、当地に先行して関係先と事前の打ち合わせをしていた羅さんと地元関係者の方々に会う。彩雲公園にある老人クラブハウスの応接室に移動して、少数民族の代表から説明を受ける（1305-1320）。敷地内では多数のお年寄りの男女がトランプ、マーじゃん等を楽しんでいた。小鳥のさえずりが艶やかで心地よい。1325公園発。

街中の瑞和大酒店で代表の皆さんを交えて昼食（1330-1440）。

仙人洞村への途中の集落（白臉村）の広場で、我々一行のために準備された彝族の少年・



少女による踊りを鑑賞する（1505-1615）。羅さんに村の服屋へ案内され、我々全員が彝族の民族衣装（チョッキのようなもの）をプレゼントされた。

1625,仙人洞村（彝族文化生態村）の民宿「荷花」着。

夕食は近くの湖畔の新築間もない明るいレストランで、黄さん（前村長）、範さん（現村長）を交えて会食（1830-1955）。前村長や村の娘さん達から声量豊かな歌で歓迎され、乾杯、乾杯の連続。そして彼我の歌の交歓となった。



会食後、村内の主な家の庭先で演じられる彝族の歌と踊りを鑑賞する。4～5軒の会場をはしごする。楽器を奏する人も煌びやかな民族衣装をまとって踊る人も、皆高年齢と覚しき男女ばかり。2300帰館。私達の帰りを待って、宿の広場（中庭）で18～9歳の若々しい男女10数人の歌と踊りが披露された。

11月11日（火）晴れ 壮（チワン）族村を訪問し、昼食後仙人洞村へ戻る 仙人洞村  
民宿「荷花」泊

0630 起床。0830 民宿で食事（固めのおかゆに塩と辛みそ。それにハスの実の粉を溶いたとろみのある甘いスープ、ゆで卵にチャーハンの様なものが出た。おかゆは今までの水のようなおかゆより数段口にあった。出掛けに葬式に出くわす。シンバルや笛、太鼓で村内を巡る。葬式を出した家に、朝早くから米などを持って村人が行き交う。0905 民宿発、丘北市内に戻り昨日の老人クラブで壮族関係者を乗せ、壮族の村（丘北県錦屏鎮碧松鷺村）に向う。沿道は歩く人、牛車、バス、オートバイ等、行き交う人達が多い。1005 村着。こ

の村で一番立派な建物(3階建て)の学校を見学後、村民委員会(公民館か?)に案内され、応接室で村についての説明を受ける。丘北市から同行した鎮長の張特華さんと副主任から村の現状の説明を受ける。村は町まで10km、標高1480m、平均気温は16度、13の集落があり人口は4918人でチワン族3998人、ミャオ族615人、彝族76人、漢族(漢族の人数は聞きもらしたが逆算すると229人となる)で年平均収入は980元。米、トウモロコシ、タバコ、野菜、落花生、三七(生薬の人参)等を栽培している。前村長で長老の王さんから挨拶を受ける。「改革・解放後は生活が向上したこと、共産党の政策を村人に普及させたこと、壮族は文字を持たない」等々の説明があった。村内を歩き、大きな農家に立ち寄り機織の実演を見学後、移動して土間で餅つきを見学・試食。兔の餅つきの様な杵で餅をつき笊の上で丸めていた。村外れの発電所と貯水池を見学。野辺の道を歩いていると半世紀前の日本の農村を歩いている想いであった。予め準備されていたのだろう、民族衣装で着飾った大勢のおばさん達と民俗楽器を奏でるおじさん達が我々と行を共にした。



村内を訪ね回った後、学校に戻り校庭で生演奏付きの彼女達の集団演舞を鑑賞。昼休みとみえ大勢の子供たちや村人が見物するなか踊りも終わり(1255)記念撮影後、先程の餅つきを実演していた農家に戻り遅い昼食。入口付近で解体していた魚や鶏が卓上に並び、歓迎の歌と共に差し出される茶碗に入った白酒を何回も飲まされる(嬉しい限りだが…)

食後、庭先で筆自慢の鎮長の張特華さんと亀田団長との間で「書」の交換が行われた。1440 終了し、1450 村を辞去する。仙人洞村に戻り(1600)、船着場から鉄製の小船に分乗して仙人洞湖に舟遊びに出掛ける(0615)。この一帯は7000年前には海であったのが地殻変動で隆起したカルスト地形で、多数の浅い湖(野生のハスと水草が生えた平均水深は3m、最深では30mとか)と石灰岩の70~80m程の小山が林立する特異な景観を見せている。



大きな鍾乳洞があることから仙人洞村と命名したが、元の名前は「普者黒」と言ったらしい。「海老や魚がたくさん捕れるところ」を意味する彝族の言葉の音に、漢字をあてたものという。1735 湖上遊覧から帰る。船着場で一人、足を滑らせて落水し前身びしょ濡れとなった。1835 より宿の庭先で夕食。村人も集まり歌と踊りの交歓会で盛り上がり(2130) 終了。

11月12日（水）曇り→晴れ 仙人洞村。午後、紅河州弥勒市に移動。 弥勒湖泉酒店泊

0900 民宿発。羅さんの案内で村内を見学。集落入口近くの「神の山」に登る。

カルスト地形の絶景を俯瞰。下山後、彝族の一番の神「虎」の石像を中心に7つの石像が  
囲む広場で彝族の信仰や伝説などについて羅さんから説明を受ける。前の村長が経営する



民宿の食堂で昼食後、1215 弥勒市に向け出発。途中  
2000m近い峠を越える。赤く濁った南盤江を渡り山  
中の焼畑跡を望見しながら尹先生から「焼畑耕作」  
の説明を受ける。1605 弥勒市の湖泉酒店着。

ここは街の外れに開発された一大リゾート地で  
タバコにより財を成した人の経営という。広大な敷  
地内には湖と見間違えるような人造池と豪華なホ

テル、レストランそれに露天風呂群が配置されている。

尹先生の教え子が設計に関わっているようで 500 元の宿泊  
代は半額になったようだ。1645 集合して山上に設けられた  
露天風呂（山頂泡池）に海水パンツを着けて浸かる。丁度良  
い湯加減であったが何かなじめない。ホテルの別館「水雲間」  
に移動して食事（1840-2025）。2030 帰館。



11月13日（木）曇り→晴れ 弥勒市～世界自然遺産石林に移動。午後、昆明へ。

雲南大学ホテル 泊

0800 集合し食事。0910 ホテル発。高速道路を走り、世界遺産の石林に 1045 到着。

入場料：大人 140 元のところ 70 歳以上無料、60 歳以上割引との掲示があったので尹先生  
が交渉したが、外人にはこの恩典は適用されないと  
の事であった。広大は園内を電動カート（200 元）  
で移動しながら林立する石塊の奇観を見物。

平日だというのに主要スポットは観光客で満杯。駐  
車場で土産物売りの小母さんが日本語で話しかけて  
きたところをみると日本人の観光客も多いらしい

（1100-1320）。正門近くの店で昼食（1330-1405）。

1415 石林を発って昆石高速道で昆明に移動。昆明市  
内で尹先生と羅さんを降ろして雲大ホテル（1615）着。

1800 ロビー集合後、大学近くの翠雲楼で夕食（1830-1920）。その後タクシーで観劇のため  
昆明会堂に移動、1935 着。雲南映象という舞踏集団の演舞を鑑賞。ダイナミックな演舞に  
一同ご満悦。観劇料 220 元（2000-2145）。2200 タクシーで帰館。



11月14日(金) 晴れ 自由行動。

雲南大ホテル 泊



0800 朝食。午前中は自由行動なので希望者(亀田、神山、松島、齋喜)で大学近くの昆明動物園を訪問。0855 ホテル発、0915 動物園西門着(入園料 10 元)。市民は無料らしく園内では大勢のお年寄りの男女が気功、踊り、マーじゃん、トランプ、楽器演奏などを楽しんでいる老人クラブに迷い込んだようだった。園舎は旧式の古いものであったが今風に動物や環境に配慮した園舎を建設中だった。1100 動物園正門→1110 隣の禅寺の圓通寺参観、拝観料 4 元。1125 圓通寺発→1140 ホテル着。1200 ロビー集合。ホテル裏の別館「银杏苑」で昼食(1215-1325)。1330 ホテル発、途中両替のため中国銀行に立ち寄り、バス(運賃 1 元)で雲南省博物館に移動して参観(1425-1540)。更に新華書店を覗き(1555-1630)、珠宝花鳥市場を散策(1640-1710)、ホテル経由組と夕食会場直行組に別れてタクシーでチベット料理店「香格里拉」1740 着。尹先生主催のお別れの宴に臨む(1830-2030)。昆明一番の有名店という。ショータイムを堪能。一同、尹先生から石林郊外の彝族の村で購入したという手作りのミニバックと写真(CD)を頂いた。2050 帰館。



11月15日(土) 晴れ 昆明～北京～日本

0500 起床、バンコク経由で帰国する前田さんを残して 0620 ホテル発→650 昆明空港着。0805 昆明発(CA4171 便、0815 離陸)。機中で朝食(840)。1105 北京着。1330 北京発(CA167 便、離陸: 1410)。1500 昼食。1800 (日本時間) 成田国際空港着。入国手続き後解散。

了